



ついのべまとめ



2011年7月～9月

みずきあかね

ひどく喉が渴いていた。体も乾く。

熱せられた石の濃い影に身をゆだね、ゆっくりと空を見上げる。

このままでは体中の水分が蒸発しそうだ。

気体に変化した私の一部は青すぎる空に吸い込まれ、他の気体とあつまり雨となって降りそそぐ。

そしたらいずれあの人の一部となるだろうか……。

☆ ☆ ☆

一緒に残業していた先輩が魅力的で誰にも渡したくなくてキスした。

「女に飢えているなら他へ行け」

「ちがいます。あなたが好きだから」

両手で顔を引き寄せて深く口づけた。

苦しそうにキスの間に聞こえる吐息が、舌が触れると引っ込む舌が可愛い。

あなたという花を手折る僕を許して。

☆ ☆ ☆

この指の先にある背中にふれたいと思うのは、甘え？ それとも愛？

たしかめるだけなら……。

胸の奥から指に伝わる切なさが指を動かす。

あと少しで指先が届く。あと少しと思った時、ふり向かれた。

びくっと手を引っ込めて作り笑い。

「どうした？」

優しく笑わないで。泣きたくなる。

☆ ☆ ☆

甘い人生はキリギリスのように自滅を招くというなら、私生活も清く慎ましく生きてちょうどいいのだ。

恋愛などという悲劇に心を動かすなどムダだ。あるのは己の努力のみ。

そんな僕に手を伸ばす君はギリギリのように人生を謳歌する。
アリみたいに勤勉でいたかった僕は、眩しい君に畏怖し、焦られる。

☆ ☆ ☆

昔はわずらわしかった君が腕の中で眠っている。
春のように穏やかな顔で胸に赤い花を咲かせて。
僕は君の頬にキスをして、汚れた床に寝かせた。
最初は理解できなくてごめん。
泣く君も笑う君も怒る君も大好きだよ。
...そして僕は暴動を起こしたロボットの仲間達を殺すために立ち上がる。

☆ ☆ ☆

教壇に立つ俺の背中に突き刺さる視線。
ふり向けば窓際の秋山さん。俺嫌われてんのかなあ...。
放課後、テニス部のユニフォームを着た秋山さんと廊下ですれ違った。
彼女は俺の前で背伸びをして目線を合わすと
「先生字が汚すぎ。若いんだから直したら？」
よ、余計なお世話だあああ！

☆ ☆ ☆

短冊はまだ何も書けずにいた。
願い事はひとつしかない。でもそれを書いて公衆の面前に晒すのは気が引ける。
非常識な願い事ではないと思うんだけど、書いたのが自分だって知られるのはいや。
でも願いが叶うなら...。
「肉まんをお腹いっぱい食べたいな☆」
なんてやっぱり書けない！

☆ ☆ ☆

なんでこんなに寒いんだろう。

目を開けると真っ青な空。

地面は固く冷たいコンクリートで、体を起こすときしぎしと音がした。

隣を見れば昨日一緒に飲んだ同僚がまだ夢の中。

独り言のように私生活の寂しさを打ち明けた同僚に言ってやりたい。

朝は誰にでもやってくるんだ。

「おい起きろ」

『会いに行ってもいい?』

彼女からのメールにため息。大学生はお気楽でいいよな。

『七夕って織り姫と彦星が一年に一度会える日だけど、それは自業自得で仕事サボってデートしてて怒られたんだよ。知ってた?』

って返信した。

会いたいのは俺も一緒。

仕事が終わったらデートしような。

☆ ☆ ☆

最近、あの人の声だけに敏感になってる。

遠くにいても聞こえるあの人の声。

今日の晩ご飯の話も悩み事も別に聞き耳を立てているとかじゃないのに聞こえてくるんだ。

これってあの人のこと好きってことなのかな?

と後輩に相談された。

俺は苦笑しながら否定した。

あいつ普通に声でかい。

☆ ☆ ☆

地主様が後ろの茂みで見ている。

逃げられない。

波打ち際で三つ指そろえて挨拶し湖の浅瀬に足を進める。

つま先、膝、腰...

生け贄に選ばれた私は村を守るため主様に食われる。

怖い。

その時若者が現れ力強く抱擁され「俺の花嫁」と唇を吸わるまま水底へ...

今は子だくさんの母親だ。

☆ ☆ ☆

通信機から電波に乗って届く声はとても優しくかったから、前に友達になって欲しいと頼んだんだ。

『...にちは、...昼...ースです』

「また会えたね」

『〇〇で行われた空爆により』

「今愛してるって言った？ 僕も。今度海を見に行こう。浅瀬に魚がいるよ」

返事はなかった。

外国語は難しい。

☆ ☆ ☆

早朝

「ねえ、起きて」

耳元で囁く彼女の声。

優しく胸元をさすられ、気持ちよく目を開けると花のような笑顔の彼女...じゃなくて万能お手伝いロボット。

「おまえ彼女の声マネやめろ」

「だってこれでないとマスター起きないでしょ？」

毎朝それで起こされて悲観的になる俺の身にもなれ。

☆ ☆ ☆

残業終わって帰ろうとしたら歩道橋の階段の踊り場に女の子がいた。

偉そうに俺を見下し笑っている。通り魔の噂は聞いてたけどこいつか？

「お兄さん遊びましょう」

「ベッドの上ならな」

「私に勝ったら好きにして」

彼女はナイフを抜く。

自然に俺の口端が上がる。後悔するなよ？

☆ ☆ ☆

昨日の雨で出来た水たまりにつま先がぬれた。
普通の靴にすれば良かったと後悔していると、
「うわなに!？」
脇に手が入れられ地面が遠くなった。
水たまりを通り越して降ろしたのは隣のお兄ちゃん。
「大丈夫？」
高校生の私を子ども扱いするのはやめて。
無自覚な笑顔に腹が立つ。

☆ ☆ ☆

山際が少し明るくなり夜明けを告げている。
紫色の雲が細くたなびいていく。
私は感嘆のため息と共に黒々とそびえる山々を見つめていた。
古典の文章そのままだ。夫に付き合っただけでキャンプに来てよかった。満足。
その時空腹でお腹が鳴った。
朝食を作ると言い張った夫は火起こしで苦戦中。

制服じゃなく黒いスーツを着たあいつはライトの逆光で三割増しかっこいい。

街で見かけたあいつは違法なバイトをしてるからバラすなよと言いつつ駅まで送ってくれた。

ほのかに香るコロンの香りに顔が熱くて下見たらのぞき込まれた。

「俺が好きなら俺だけ見てろよ」

って！

萌え殺す気か！

☆ ☆ ☆

そうか、夏が来たんだ。 と、「あれから」を思う。

部屋の中は相変わらずで、そこで暮らしている自分も相変わらずで、何も変わらない部屋と変わっていく世界のギャップに苦しむ。

何が起こるかかわからないとニュースは囁くけど、あれ以前も何が起こるかかわからない世界だっただろうと私は嗤う。

☆ ☆ ☆

あの人が好きと自覚してから心は氷に閉ざされた。

あの人のためなら手が泥や血にまみれても平気。

「さあ幼なじみ殿、昔みたいに鬼ごっこしよう。私が殺る前に逃げたら君の勝ち。でも強引に連れ帰ると言うなら、容赦はしない」

苦悶の表情を浮かべる君に刃を向ける。さあ来い！

☆ ☆ ☆

学校に行く途中、結んでいたピンクのシュシュがほどけておちた。

はやく拾おうと屈んだら、制服の男の子が拾ってくれた。

「ありがとう」

手を伸ばすと男の子はゆっくり手の上に乗せてくれた。

「久しぶり。髪、のばしてるんだね」

その子が幼い頃未来を誓った子だと気がつくまで数十秒。

☆ ☆ ☆

昼の公園は午後の気だるさを共有する人たちがそれぞれに過ごしていた。

その中で白い日傘をくるくる回す女がいた。

彼女は花壇にしゃがみ、まだ咲いていないひまわりの上に白い手を伸ばすとふわりと撫でた。

すると花はみるみる開いていく。

周りを見たが誰も気がついてない。

俺だけが...

☆ ☆ ☆

遠距離から彼女を観察。

着がえの時背骨の一つ一つもしっかり覗けちゃう高性能のスコープでの画像は録画したいけど
そういうのはなしの方向。やっぱ生で見たいし。

なんて思ってたら携帯の着信音。

無言で出ると

「おはよう☆」

と、スコープの中の彼女が微笑んだ。

バレてたのか.....。

☆ ☆ ☆

遠距離に出張に行ってしまった彼。

たった二日会えないだけなんだけど、なんとなくさびしくてメールした。

でも素っ気ない返事。

そりゃそうだよ。一日だもの。

あの人なら大丈夫。だって愛され上手なもの。うまくやってるよ。

さあ好物でも作って待とう。

笑顔でおかえりを言えるように。

☆ ☆ ☆

自分だけのご褒美に、大好きなアイスを買った。

いいでしょ？ 暑い中勉強してきたんだから。

ペリペリと周りの紙を剥いで、出てきたチョコレート部分を噛んで、アイスクリームをぺろりとなめる。

首筋から鎖骨に汗が流れてシャツに染みた。

あー、幸せ。

宿題がない夏休みならもっと幸せ。

母が作った弁当の隅で強烈な存在感を放つ鮮やかな黄色のたくあんは、蓋に黄色い染みを作るし匂いもきつい。

それをボリボリかじって高校時代のいいことも悪いこともご飯と共に飲み込んできた。

なのに今更新婚の食卓で対面するとは思わなかった。

少し遠慮しろ。

俺はお前が苦手なんだ

☆ ☆ ☆

小さな君はガラスの向こうから老若男女どんな人にも夢に見るような笑顔で接していた。

こんな僕でさえも。

毎日店に通い君が僕に興味を示してくれるのを待った。

でも限界だ。待つだけの孤独な毎日はいけない。

僕は店主に有り金全てを差し出した。

「すみません！あのフィギュア下さい」

☆ ☆ ☆

寝る前、昔話みたいにぼつぼつじいちゃんが話し始めた。

僕は無関心を装いつつ聞いていた。

「うちは代々カもちの人が出る家系なんだ。そういう人の右腕にはアザがある。その力はお姫様を守るための力なんだよ」

「うそだあ！」

弟がケタケタ笑う。

僕は右腕を押さえ嫌な汗を掻いた。

☆ ☆ ☆

爆弾が炸裂する音が聞こえる。敵はすぐそこ。

胸元に下げた指輪をさわる。冷たい手触りに涙がでそう。

ごめんね。

キスを恥ずかしがった私が悪かった。こんなことになるなら……。

息を吐く。

大勢の足音が近づいてくる。

「行くぞ」

上司の命令で低い姿勢のまま一斉射撃の準備。

的は、彼。

☆ ☆ ☆

私にしか見えない少女は今日も私の横に立って笑っている。

「行ってきます」

牛乳を飲み干して立ち上がると、彼女は私の胸元を指さした。

リボンがほどけている。結び直すと彼女は笑った。

その笑顔は自分に似ていて苦笑。

そろそろ電話をしてみようか。

生き霊を飛ばしてくる心配性の母に。

☆ ☆ ☆

深海魚を思わせるピカピカしたドレスを着たお姉さんは、いつもの貼り付いた笑顔でお客さんとお酒を飲んでいる。

無神経に僕のお姉さんの体を触るお客さんに腹が立つ。

僕がもっと稼げるようになったら結婚して一緒に住もうって告白したら、お姉さんは今の関係がちょうどいいと笑った。

☆ ☆ ☆

土産物店でラベンダーの香水を見つけた娘が変な匂いと顔をしかめた。

日常にはあり得ない強い匂いに苦笑する。

昔、ラベンダーの香りでタイムスリップする小説を読んで、ラベンダーに強いあこがれを抱いたことがある。

匂いをかいでみた。

背すじが伸びてちょっと昔に戻った気がした。

新雪を踏みしめて君の後を着いていく。

胸元まで雪に埋もれ縦横無尽にラッセルして新雪を食む君は一世紀前まで8月が暑い季節だったって知ってた？暑くて眠れない夜があったんだって。

下着でいても暑かったみたい。

今は分厚いコートを着てちょうどいい。

また降ってきた。

さあ帰ろう。

☆ ☆ ☆

男友達の家で飲んでたらいつの間にか落ちたらしい。

深夜目が醒めるとそいつが涙声で許しを請いながら両手を宙に伸ばしてあがいていた。

やがて目をカッと開いてゆっくり私を見ると有無を言わず抱きしめた。

後で何があったかちゃんと話せ。

それから、無自覚にも程があるぞ、馬鹿野郎。

☆ ☆ ☆

夜、彼に難破船を見に行こうと言われて海辺に来てみれば、悪ガキどもがロケット花火を難破船目掛けて打ち上げていた。

夜の海なんてロマンチックだと思ったんだけどな。

あ、パトカー来た。

お巡りさんの怒号、逃げ惑う悪ガキ共。

薄着で寒かったけど、おかしくて情けなくて笑っちゃった。

☆ ☆ ☆

荷物を整理していたら手紙を見つけた。
犬コロのように公園の中をかけずり回った従妹の手紙。
黄ばんだそれには今週末の日付に絶対に来てねと書かれていた。
もうあいつも忘れてるだろうな。
深夜ソファにもたれていたら悪戯心がくすぐられた。
20歳の誕生日か。プレゼントは何にしよう。

☆ ☆ ☆

普段絶対行かない高級レストランで待ち合わせ。
案内された席で俺は縮こまっていた。
なんだこれは羞恥プレイか？
空腹で腹が鳴るのも周りに敏感になりすぎて恐縮する。
その時、かしやりと携帯の撮影音がして顔を上げると、いつの間に来たのか前の席で奴が笑っ
てた。
てめえ撮るな！

☆ ☆ ☆

先生は私を壊れ物のように抱擁する。
腕の中で私はただ彼の鎖骨に額を押しつけていた。
夕焼けが沈みきったところで私は制服のリボンを結びながら先生に笑いかけた。
大丈夫。
先生が私に夢中なんて誰にも言わないから。
でも今度は先生からキスしてくれると嬉しいな。
「先生、また明日ね」

☆ ☆ ☆

家族が寝静まった後風呂に入る。
体を丁寧に洗って髪も洗ってゆったりと浴槽に身を沈める。口元まで。ぷくぷくとあわを作る

。

明日は約束があるから早く寝なくちゃ。

彼女の誕生日のプレゼント、なににしよう。

浴室にぷくぷく小さな音だけがする。

そして僕は深海に漂うクラゲの夢を見る。

渡り廊下を歩いていると雪のようにちらちらと小さな紙が降ってきた。
拾ってみると可愛い便せんの一部で、悲しいという字が読み取れた。
校舎を見上げると、君が手すりにもたれて空を見上げていた。
冷たいようだけど紙くずになった恋はあきらめなよ。
前から君のことが好きな僕はここだよ。

☆ ☆ ☆

夕方の高架下で喋ってたら君の携帯にメール音。
物思いに耽ってるような顔して携帯を打つから、わざと目の前に立ってみた。
僕の影が君の手元におちて、やっと顔を上げた。
笑う君の額に光る汗が何故か艶めかしくて思わず唇にキスを落とした。
「どうして？」
聞かれても僕にもわからない。

☆ ☆ ☆

笑い声が嫌いだ。
自分を嗤っているようで。
視線を合わせる奴が嫌いだ。
子ども扱いされているようで。
話しかけてくる奴が嫌いだ。
下心を持っているようで。
触ってくるな。話しかけるな。うざい。あっちいけ。
でもそいつは困った顔をしながら笑って言うんだ。
「だって君が好きだから」

☆ ☆ ☆

階段で立ち止まった先輩がふり向いた。

「今は田中君の方が高いね」

と微笑む。

「どうせチビですよ」

女なのにでかい先輩に俺の悩みはわかるもんか。

外は曇天。早く帰らないと……と思った瞬間、ものすごい雷。

恐ろしげに身をすくめる先輩が可愛くて思わず頭を撫でた。

今切実に、背が欲しい。

☆ ☆ ☆

息子が羽化する前の蟬をつかまえてきた。

自由研究をかねて変化を観察することにした。

小枝に必死に掴まる背中が割れて、中から白い体が出てくる。

喜ぶ息子は持てる実力の全てでそれをノートに書き留めていく。

自分だけの力で生まれ変わる蟬のたくましさに、俺もがんばらねばと思う。

☆ ☆ ☆

隣の席の同僚がなれなれしい。

赤の他人なのに妙に心配するし、自分のことを知ってほしいっていろいろ話したがるし、最近薄着で目のやり場が困るんですと赤面する。

そのうち告白してくるんじゃないだろうな、なんて苦笑いしていると、ゆっくり考えてくださいって穏やかに微笑まれた。

☆ ☆ ☆

誰？ このキス。

酒宴の余興で目隠しと手を縛られ放置された後、唇に降ってきた柔らかい感触。

遠慮がちに味見された後、入ってきた舌に答えてやると嬉しそうに反応する。

当ててみるとばかりに激しくなるキスに降参。

甘い声で彼の名を呼ぶと目隠しがはずされた。

同じ目線に泣きそうな彼の顔。

☆ ☆ ☆

カサブタは治りかけがいちばんやっかいだ。

ついついはがして新しくできた皮膚にさわってちょっと痛かったりする。

心の傷って奴もそんなもんで、じくじくしてた傷も時間が経つにつれカサブタが覆う。

よせばいいのにたまに触って痛くする。

君がいなくなってできた傷も、今はちょっとだけ痛い

存在自体が生きている意味だと言われて何が嬉しい。
誰にも必要とされずただ存在するだけなんてむなしすぎる。
だからといって必要とされるのも面倒だ。

「胸に開いた穴を埋めるには愛しかない」

と牧師が言う。

馬鹿馬鹿しいと思いつつ、愛という甘美な響きは俺の胸をざわつかせた

☆ ☆ ☆

9時なのに仕事が終わらない。

サービス残業でイライラしている私に後輩が牛乳たっぷりのカフェオレをくれた。

程よい温度だったから一気に飲み干す。

「終わらないから、先帰って」

と言ってる側から急に体もまぶたも重くなった。

閉じられる視界に後輩の囁き声が響く。

「誰にも渡しません」

☆ ☆ ☆

久々に顔を出したバーのカウンターに座ってたら、知らん奴が横に座った。

まあ最初は普通に喋ってたよ？

そのうち雰囲気になって唇を舐められて

「ごちそうさま」

なんて言われた日にや……。

翌朝最悪の気分で大学に行ったら、昨日の奴が教壇でにんまり笑ってた。

☆ ☆ ☆

思い切り大きな口でがぶりとやるとじゅぶっと口の端から雫が垂れる。

ぺぺっと地面に黒い種を飛ばしてもう一度かぶりつく。

向かいで食べている奴はしゃくりと小さな口で食う。

「西瓜はもっと豪快に食え」

奴は顔をしかめた。

「汚い食べ方ですね。赤の他人にふりをしたくなる」

うるせえ！

☆ ☆ ☆

遠距離親友というのがいる。

奴は男だけど親友。好きな人というわけじゃない。

長い間会わなくても片手挙げて「よう」で済む奴。

今日は一年ぶりに会うからおしゃれした。

人並みの向こうに見つけた奴につま先立ちで「よう」と片手をあげた。

でもその反対の手は恋人につかまれていた。

☆ ☆ ☆

ビルの上から見ると街は春の水底に沈んでいるみたい。

なのに彼は私の青いセロファンを奪い手の中でぐしゃりつつぶすと、ライフルを押しつけて唇にキスした。

「帰ってきたらもっと触って」

でも彼は仕事のことばかり。

わかってる。だからこっち見て。

今だけでいいから私のものでいて

☆ ☆ ☆

情けない顔をして僕の目の前に立っているのは、先日亡くなった友人。

幽霊なんだから怖くて当たり前なのに

「おまえも恐がるんだな」

と笑う。

「思い残したことがあるのか？」

奴は俺の頬に手を添えた。幽霊の手触りって冷たい。

「おまえともう少し一緒にいたかった」

ああそれは俺もだ。

☆ ☆ ☆

ペルセウス座流星群観察会に参加した。

同じ星空を見あげる君が指を絡めてきた。

あ、大きな流れ星。君も同じように願ってくれてるかな？

「来年も一緒に流星群を見られますように」

彼女の声に照れた。願いは僕も一緒だよ。

来年も一緒に見よう。僕は彼女の手を強く握りしめた。

あなたの腕を撫でてあなただと確認。

顔にも触れてみる。

額、眉、目、鼻筋、唇にキスして確認。

肩、鎖骨、胸、くすぐったかったのか身じろぎされて手を引っ込める。確認。

腰、足、足の指。全部あなたと確認。

過去に私の物だったあなた。

取り返せて良かった。

もう誰にも渡さない。

☆ ☆ ☆

彼女がぬいぐるみを置いていった。

僕の部屋なんだから嫌だと言ったのに。

ベッドの上のそれはすごく存在感があって、いつも僕に笑いかける。

だからいやだったんだ。君がいなくなった後は淋しくてたまらないから。

目を合わせないようにしてたけど、なんとなく君にするみたいにキスした。

☆ ☆ ☆

新雪を思わせる肌の色を見て自然に涙がこぼれた。

手を添えればまだ温かい。

「なんて美しい方だ」

涙声は周りにいる小人達に気付かれなかつたらうか。

森の中で偶然見つけた異国の姫に送葬のキスを……ってまさか生き返るとは思わなかつたけどな！

ビックリする俺に彼女は美しく微笑む。

☆ ☆ ☆

真夜中一人で原稿を書いている手が止まった。

小説を書くのは趣味なのにたまに苦しくて悲しくて、なんでこんなことしてるんだろうって泣きたくなるんだ。

もうだめだ。文字を追う指先が止まった。

マウスを操作してツイッター見たら、みんな苦しんでも立ち上がった。

一人じゃなかった。

☆ ☆ ☆

早朝、起きたら床の上だった。

酔っ払ってそのまま寝たのか。寝ぼけながら起きたら背骨がぐきっとなって動けない。

これがいわゆるぎっくり腰？

痛くて脂汗がでてくる。

痛みをこらえて携帯を鳴らすと階下にいた兄貴があわててお姫様抱っこしようとした。

いてえさわんな！

の声も出ない

☆ ☆ ☆

縁側から部屋に入ろうとしたら柱でくるぶしを強打した。

そりゃもう目が飛び出るほどの痛さで泣けてきた。

「くうっ」

目の端っこに涙が浮かんで、この痛みと情けなさを誰かに話したくなかったけど生憎今日は留守番で一人だ。

そのまま畳に寝転がったら、庭の日陰に転がる猫と目が合った。

☆ ☆ ☆

夏のはじめに食べたガリガリ君の梨味は、袋を開けた途端懐かしい匂いがした。

梨の匂いといえばそうかもしれないけど、強烈に鼻につくあれはセメンダインの匂いによく似ていた。

小学生5年生の8月31日。

工作で必死になったあのときの匂いだ。懐かしい。

もう一度食べたかったな。

☆ ☆ ☆

好物だけを食べられればいいのに。

ナスの煮浸しをじと〜と睨みながらぼそぼそ飯を口に運ぶ。

あのぐちゃってなるのがいやなんだ。軟弱で。

自分だけの不幸を呪いながら息を止めてナスを口に放り込み急いで租借して飲み込む。

ため息と共に思い出した母の笑顔。煩わしかったあの日は遠い

空腹を感じて物を探す。

周りのゴミをかき分けてやっとひとかけの菓子を見つけてもそもそも食べる。

食べることが煩わしいと思ったら人間はおしまいらしい。

くるぶしを掻きながら携帯で「腹減らない」と呟くと友人から「うまいもの食わせてやるから出てこい」と笑顔付きで返ってきた。

☆ ☆ ☆

鏡の前で手を伸ばす。

冷たい感触の向こうにいる自分は俺を上目遣いに睨んでいた。

「盗るな」

口が形作る。

おかしなことを言う。あれは俺のものだ。

かわいがってやるよ。昨日ひどいことを言ったお前の代わりに。

頭を撫でてキスをしてその先もやってやる。

お前は鏡の向こうで泣いている

☆ ☆ ☆

髪を左手で押さえながらラーメンを食べている向かいの君を眺めていた。

「食べないの？」

「うん」

だっておいしそうに食べる君を見てお腹がいっぱい。

情けないことに君が好きすぎて食べられないんだ。

突然パンが降ってきた。

「ちゃんと食え」

委員長の冷たい目に気圧されて袋を開けた。

☆ ☆ ☆

酔っ払ってちょっとはしゃぎすぎた。

噴水に落ちたから体中が臭い水が服の裾から滴ってる。

家に上がって勢いよく風呂場に飛びこむと、服のまま上から熱いシャワーを浴びた。

くつつつと笑いながらボディソープを服の上から泡立て、敏感なところも念入りに洗う。

はあ、馬鹿なことをした！

☆ ☆ ☆

小さな僕。

その人にすがって泣くんじゃない。

その人の耳は泣き声を聞き取ることはないし、鼻は君の香りをかぐことはない。

瞳に君の姿を映すこともない。

小さな僕。

そこから立つんだ。

彼は小さな自分の頬を撫で上げた。

涙で濡れた手を見つめ立ち上がると、潤れたはずの涙が頬を伝った。

☆ ☆ ☆

星空を仰ぎ見ながらしゃくしゃくと好物のりんごを租借する彼を私は複雑な思いで見ている。

この前の告白の返事をしなくてはならないのだが、彼は全く聞く気がないようだ。

恋や愛でなく兄のように慕っておりますと返事をすれば関係が壊れるかもしれない。

そんなのは嫌...なんて情けない女なんだ私は。

☆ ☆ ☆

無神経なヤツらに香水を吹き付けられましたと言えば

「うそ」

と言われ、

通りすがりの人の移り香だと言えは

「ほんと？」

と言われ。

信用されていないのは腹立つが、嫉妬で泣きそうな顔して迫られる現在の状況は悪くない。

お前に贈るために試したとは言えないから、キスで誤魔化した。

☆ ☆ ☆

女の子が集まると恋バナになる。

誰々が誰々のことを好きとか私も彼がいるとか教室で堂々と話す神経がわかんない。

「律は誰が好きなの？」

話ふられちゃった。いやだなあって思ってたら斉藤君が教科書の角で頭を叩いてきた。

「ってえ！」

逃げる斉藤君を追いかけた。

なんか顔、熱い

☆ ☆ ☆

僕は君を助ける人になりたい。

でも僕は普通の人なので空腹の君に自分の顔をあげることはできないし、怪獣は襲ってこない。

勉強も君の方が出来るし足も君の方が速い。

考えていて哀しくなった。

「無力な僕を嫌いにならない？」

すると君は笑った。

「あなたといることは何より楽しいのよ」

☆ ☆ ☆

小さな光が虹を帯びて机の上にこぼれている。きれい。

それはちょっとした失敗で落ち込んでいた私のため彼が買ってくれたガラス製のウィンドチャイム。

なぐさめてくれるのね。

ああ君には情けない姿を見せられないな。

がんばろう。自分だけ落ちるの嫌だもん。

彼と一緒に学校に行くんだ。

☆ ☆ ☆

視界の向こうに先輩がいる！

「おはようございます！」

「おはよう」

きゃ〜ん、先輩の笑顔今日も素敵。

一緒に学校に行けるって楽観的に考えてたら

「よう」

って障害物の先輩の友人が登場。

悲しいかな先輩は私とこいつが付き合ってると思ってるの。

好きなのはお互い先輩なのに……。

☆ ☆ ☆

「好き」

と君は眠ってる僕の頬にキスをした。

「好きだよ」

次は額。反対の頬、鼻先、あごに「好き」と一緒にキスの雨が降る。

ぽつりと頬に温かい雫が落ちた。

「好き」

くちびるのキスは一番長かった。

目を開けて

「僕も」

と唇を舐める。

驚く君の顔を両手で固定して舌を入れた。

まだだめ。

☆ ☆ ☆

何処かお昼に行こうと言ってみたら、

「どっちでもいい」

なんだよその無関心な答え。

現在12時。腹減ってるから早く決断してくれ。

「じゃあお好み焼き」

「却下」

「ラーメン？」

「却下」

「レストランでランチ」

「却下」

「じゃあ何だよ！」

って怒鳴ったら

「お前」

と首筋を甘噛みされた。

☆ ☆ ☆

喉が渴いた。

脚はもう動かない。

地面に体を投げ出して肺の中の空気を全部吐く。

たくさん歩いた。

もう歩けない。

逃げてきたのか向かっていくのか、どっちでも、どうでもいいような気がした。

でも希望も絶望も苦も楽も全部自分の物と知って立ち上がる。

そしてまた歩き出す。

☆ ☆ ☆

デイブが

「月に行く」

と乗り込んだロケットは私が書いた音符つき。

ロケットは無事に月に到着。

でこぼこの砂場を丁寧に踏んで靴の足跡を残した。

次は火星の赤いベンチで一休み。

お日様のぬくみであったかい。

木星でジャンプして土星をぐるぐる回してたら

「ごはんよ」

の声。

また明日ね。

☆ ☆ ☆

全速力で走った後、公園のベンチに両手をついて膝を折った。

パン屋の親父が

「汚い子どもに売るパンはない」

と言ったから、突き飛ばして持って来てしまったふかふかのパン。

東の空に満月が上がってきた。

お母様のような優しい光が切なくて、私は月に背中を向けてパンにかぶりついた。

☆ ☆ ☆

夕方の東の空に、大きなお月様が浮かんできました。

紫色の雲からちょっとだけ頭を出していたので帽子をかぶっているように見えます。

スズメ達が街路樹で

「お月様はすてきだね」

って話をしています。

やがて暗くなり闇がスズメ達を寝かした後、月は優しく天頂から街を照らすのです。

☆ ☆ ☆

手にキスの感触にぞっとした。

私のお見合いのために隣国の王子やら貴族がたくさん来てるのは理解してるけど、もう逃げたい。今すぐ馬で駆けていきたいと思ってたら、隣に立つ執事が

「今は我慢です」

と青いドレスの裾を目で差しながら耳打ち。

キスした奴を蹴り飛ばそうとしたのばれた。

☆ ☆ ☆

ホットケーキのようなまあいお月様にシロップをかけて食べちゃいたい。

おいしそうだなあって思ってたなら、

「ほら」

って丸くて白いだんごが目の前に出された。

はむって半分食べてみたら、中はお芋のあんこだった。

「甘くておいしい！」

「よかった。新作なんだ」

彼と笑う十六夜の縁側。

☆ ☆ ☆

それは愛され上手だった。
花のような笑顔は誰よりも可愛く誰よりも愛された。
姉の腕に抱かれているときは私よりも姉妹のようだった。
だから壊れた時にはいい気味だと思った。
腕や足が取れて汚れた時はざまあみろと思った。
でも姉が私も抱いてさめさめと泣いた時、私は己を恥じた。

☆ ☆ ☆

星空はいつも美しく私の興味をそそる。
天体望遠鏡を覗いて観察していると、草をかき分ける音と共にいつもの香水の匂い。
顔を上げると彼が私の手元をのぞき込んでいた。
「探したよ」
心配そうに言う彼に
「野原の方が観察しやすいから。今日は金星が」
言いかけたところで唇を塞がれた。

☆ ☆ ☆

別に太平洋を難破船で漂流してるわけでもないし、吹雪の山で遭難したわけでもない。
外に出れば食べ物を買えるんだが...金がねえ。
「栄養失調で人生終了しそう」ってメールしたら友達が食料持って来てくれた。
「悪い」
謝ると奴は含み笑いした。
「そのうち体で返してもらうから」
...え？

☆ ☆ ☆

ロボットの添い寝って最初はどうかと思った。

してみると温かくて柔らかい快適な抱き枕みたい。

「早く寝てよね！」

口は悪いけど美しく優しい彼女は私に背を向けた。

その背にそっと寄り添って眠る。

「おやすみ」

眠りに落ちる前に聞こえた声はとても優しく温かかった。

「おやすみ」

☆ ☆ ☆

晩ご飯のエビフライを取られまいと抱え込んだ弟に呆れてしまった。

「ちゃんと前をみて食べなさい」

母が叱ると

「はい」

って渋々前を向いたとたん、父が弟の皿めがけて箸を出す。

「渡さないもん！」

半泣きの弟に父が舌打ち。

「もうお父さんったら」

と微笑む母よ。そこは叱るところだ。

『流れ星が見えた』

キャンプに行ってる夫のメールに釣られてベランダから外を見る。

でも曇天はネオンの明かりで赤黒く光っているだけ。

『寒いから結構厚着してる。でも星が綺麗だ。昔話の星空ってこんな感じかな？ 生まれたら一緒に行こうよ』

私は大きくなったお腹をさすって微笑んだ。

☆ ☆ ☆

子どもが檻越しのライオンと対峙していた。

ライオンは子どもをえさと見てるのか。子どもは恐ろしくて足がすくんでいるのか。

それともお互いに興味を持っているのか。

それなら彼等がお互いの考えを話す未来は来るかもしれないわ。

私の考えをよそにライオンと子どもはゆっくり立ち去る。

☆ ☆ ☆

水族館に二人で遊びに来た。

「家族で来たことがある」

彼女は懐かしそうに笑う。

「その時厚着していてすごく暑くてどこかに上着を忘れて怒られたわ」

そして少女のように駆け出す。

「はやくはやく！」

鰐のトンネルを抜けペンギンに挨拶してイルカに会いに行こう。

私は彼女を追いかける。

☆ ☆ ☆

ひたりと足を忍ばせて彼の部屋に忍び込む。

拾った女に綺麗な客間を用意するような貴族、聞いたことがないわ。

何もないから恩は体で返すしかないけど彼は眠り込んでいる。

怖いけど.....震えながら彼のベッドに入ると、目を開けた彼に

「淋しいのか？僕もだ」

とキスされて抱きしめられた。

☆ ☆ ☆

朝起きたら君が小さくなっていた。

突如現れた幼稚園児に手を焼きながら研究所に連れて行き博士に相談してみた。

「小さくなりたいと言ったから試薬を飲ませた。もどす薬を開発中。暫く現状維持」だと？

「何でそんなこと...」

紅葉のような手で僕に抱っこをせがむ君を胸元に抱いた。

☆ ☆ ☆

ボールの冷たい水の中に浮かんだ花。

十四歳の誕生日にもらった花束は、色とりどりのリボンが結ばれた十四本のバラだった。

兄のように慕っている人からのプレゼントはうれしかった。

でもそれより誰よりも大事な人に嫌われたことの方が悲しかった。

それを恋だと気付くまであと数日。

☆ ☆ ☆

その孤独な魂を救うため、私は地上に舞い降りた。

曇天を見上げる瞳に私が映る。

「ああ死神。私を殺すのか？」

いや。愛した民の手により肉体を手放そうとしているのは王よ、お前だ。

「まだ生きていたい。愛する民を導くために」

悲しい王よ。それは叶わぬ。

私の鎌でお前を送ろう。

自分以外のベッドで目が覚めた。

昨夜強かに酔って誰かと意気投合をしたがその後覚えてない。

やっちゃまったと反省していると知らない女が牛乳とトーストを枕元の小さなテーブルに置いた

。

「おはよう。遅刻するよ」

彼女は背を向け鏡の前で化粧を始めた。変化にびっくり。

こいつ同僚だ。

☆ ☆ ☆

驚いて動けなくなった俺に彼女は項垂れていた。

「三ヶ月だって」

人生最大の衝撃だった。まだ大学生だったからもっと遊びたい欲求が強かったんだ。

結局生まれてすぐ学生結婚したんだが、手伝わないからと嫁に捨てられた。

17年後、目の前で項垂れる息子と若すぎる嫁に苦笑する。

☆ ☆ ☆

「無自覚でした。そんな風に思われていたなんて」

ぺこりと頭を下げられ、僕は苦笑した。

先日突然降り出した雨で苦労してた小学生に彼女は自分の傘を差し出した。

その仕草がとても自然で

「そこから好きになりました」

玉碎覚悟の告白は極上の笑顔と

「お友達から」

の一言で救われた。

☆ ☆ ☆

朝、お母さんに嫌いな牛乳を飲めって言われた。

仕方なくインスタントコーヒーを足して砂糖をがばがば足して飲んだんだよ...という話を現在
彼氏未満の友達にしたら、

「牛乳って胸でかくなるんだよな？」

と言われて胸元を覗かれて

「もっと飲め」

と言われた。やっぱ牛乳嫌いだああ！！

☆ ☆ ☆

右手と右手を胸の前で合わせて、指と指を絡ませて、視線と視線を結んで、互いの唇に触れる

。

絡み合う指から視線から唇から流れてくる「好き」と「ほしい」と「切ない」。

テレパスの恋人達は互いの感情を読まないのがルール。

垣間見た私への恐怖は忘れてあげるから、このまま愛して。

☆ ☆ ☆

「みんなこいつを王子様みたく甘やかすんだ。噛んでも怒らないし、ご飯を食べさせる時もテ
ブルからあげちゃうし、僕が寝そべってマウントされちゃっても笑うだけ」

哀しそうな顔をする親友よ。

お前も

「こんなに小さいわんこを歩かせるのは可哀想」

って懐に入れているじゃないか。

☆ ☆ ☆

くるぶしをぺちっと叩いて蚊に刺された後をばりばりと搔きながら庭に立つ。

ここにマンリョウ、ここにモミジを植えよう。

木々を眺める縁側も必要だ。

親父のお気に入りだった草ぼーぼーのわずらわしい庭を美しく整えてやる。
ここにある全てが大切な花だという親父の気が知れない。

残業中に「ちょっと」と席を外した課長の悪口を呟きながら叩くキーボードの音だけが部屋に響いている。

電気が消された向こうのフロアから闇が足下に絡まってくる。

正直怖い。

その時後ろに気配がしてひやっと首筋に冷たい物が！

思わず叫んでふり向けば、カップ片手に課長が笑っていた。

○ ○ ○

冷房で冷えてしまった手をさすっていると、課長が声をかけてきた。

「大丈夫か？」

寒いんです。

冷房の温度上げて。

26度って寒すぎ。足下厚着しても追いつかないの。

節電どうした！ と心の中で悪態をついていると、

「朝も手足冷たいよな、おまえ」

...って耳元で囁くな！ セクハラ課長！

○ ○ ○

鏡に映った私が私を見ている。

どこが気に入ったのか、あの人は私を「可愛い」と言いながら大きな手で私の頭をよしよしと撫でる。

その手は一筋の髪をすくい取りもてあそび、やがて耳をくすぐり頬を撫でアゴのラインをなぞって唇を人差し指で...

鏡に映った私が赤い頬で唇に手を当てた。

○ ○ ○

目を開けると視界いっぱいにシャツに隠されていく背骨の凸凹。

しゅるりと音を立てて結ばれるネクタイ。
絡まる指先と「おはよう」の低い声。
唇に落とされる温かな感触。
おはようは言いたくない。
でもこれ以上眠っていると遅刻だわ。
「おはようございます」
二人の朝は切なくて苦手。

○ ○ ○

気分転換に化粧を直して戻ろうとしたら廊下で
「残業ですか？」
と声をかけてきたのは営業部の部長。
曖昧に笑って誤魔化そうとしたら
「仕事が終わったら一緒に食事でもいかがですか？」
え？
「すみません、仕事が」
等と断っていると
「遅いぞ」
の声。ふり向くと課長が怖い顔で立っていた。

○ ○ ○

「ベッドの上では何度でも言ったことあるでしょ？」
にやける課長が私のデスクの横にイスを引いてきて座った。
「明日までの書類があって忙しいんです」
今日はこのまま帰れと思うのに課長は動かない。
「誰もいないよ」
低い声で囁かれても「して」なんて……言えるわけないでしょ！

○ ○ ○

俺の舌で息も絶え絶えに喘ぐお前は蜘蛛の巣に縫い止められた蝶のようだな。

肉体を快楽に委ねてしまった脆弱な精神は脳内の端の方で「なぜ」と己を責めているだろう。

なぜもない。

それは旨そうなお前のせいだ。

喰ってやるよ。

そのうすっぺらい疑問符も涙も恥じらいも何もかも。

○ ○ ○

残業してたら課長がきた。

「何のご用ですか？」

そっけなく言えば

「仕事中に失礼しちゃっていい？」

持ってたコンビニ袋から缶チューハイを出した。

「なにやってんですか！」

「あー花見？」

と私の胸元を差す。それが花のモチーフだと気がついた。

「セクハラ」

「それ恋人に言っちゃう？」

ないわ～

目の前で土下座する同僚を見下ろしながらはげしくため息。

そりゃ言いましたよ。

「あそこの仕事取れたらキスくらいしてやる」

って酔った拍子に言いました。それを真に受けて、

「させてください」

って土下座までしてどんだけ？

冗談も通じないってまさか童貞？ そんなのってないわ～。

会議室の片付けを手伝ってもらってたのに、いきなりの土下座に面食らって言葉も出ない。

けどそのままに出来ないから、

「立ちなよ」

って手を差し出したら、

「じゃあ」

って目キラキラさせて私の手を取ってすっと立ち上がった。

私よりもかなり背が高い同僚は私を抱きすくめ……ちよっまで、早まるな。

ただの同僚デスよ？

うるうるした瞳で見下ろされて、すべすべの手で顔をまさぐられた。

うんわ～ないわ～。唇も触られてマジキスしようとしてる。

確かにさぁあの仕事取るの大変だったと思う。

酔ってたらチューしてたかも。

でも今シラフで会議室で誰か来るかもだよ？

もしかして見られるの好きな変態か？

両手でアゴを優しく支えられて上向かされて、何してんだ私抵抗しないで。

なんか約束しちゃったし、減らないからいいか～なんて思ってたら、唇に優しい感触。

やっば、ないわ～。

だって私を大事にしてるってわかるようなキスよ？

目閉じてしまおう。これで相手が誰かワカンナイ。

その時、いきなり肘の辺りをつかまれて後ろに引き寄せられ、気がついたら課長の胸にいた。

なななにとパニックってたら、課長がすごく怒った顔で私見下ろしてて、そのまんまぐいって両手で顔つかまれて噛み付くようにキスされた。

「んっふ」

ちょ、ここ会議室デス！ 抵抗したわよ今度は！

あまりのことに涙がにじむ。

会議室でディープキス…ないわ～。

課長は思いっきりディープなキスして私を抱きしめながら、同僚に
「何？」
なんて低い怖い声で聞くから、同僚は
「なんでもありません！」
って半分涙目で会議室を出て行った。

あ～あ。私これからどうやって仕事してくんですかねえ彼と。
悔しくて思い切り睨み付けたら
「ごちそうさん」
って極悪に微笑まれた。

風邪の直りが悪くて体調が優れないから断り続けて一週間。

いつも嫌がらせしてくる課長も静かになった。

他の女の子には優しくするくせに、私には何ものなし。

まあ課長とは体だけの関係だったからしょうがないか。

向こうから誘ってきたから付き合ったの。体だけってどうよって思ったけど流されちゃってね

でもこれで課長と切れる。やった～！

と思ったら、吐きそうになってトイレに駆け込んだ。

吐けなかったけど。

トイレから出ると、課長と目が合……って、なんで目が合うわけ？

だって課長ここは女子トイレの前ですよ？

なのにどうしてそんな怖い顔してるの？

って思ってるうちにツカツカと歩み寄られて肩をつかまれた。

「い、痛いですが、課長」

って言ってるのに無視されて両手で両肩を壁に縫い付けられた。

「か、課長、ここ会社の女子トイレの前ですよ？」

つとめて冷静な声で言いながら、別れ話だろうな～って思った。

まあ最近断り続けてたからね。

メール来てもダメの一点張りで会社の中ではいつも通り社交辞令だけの挨拶してた。

やばい。会社なのに課長のコロンの香りが二人きりだと錯覚させる。

「体調悪いのか？」

ここ女子トイレ前ですよ。

誰かに見られたらどうするんですか。

でもこの見下ろされる感覚も目の前の唇も熱っぽい瞳も好き……。

「俺の子じゃないよな？」

ちょっとまで。そんなこと今言う！？ もうダメ。我慢できない！

怒りにまかせて膝で股間蹴り上げて

「風邪です！」

と言い放ち部署に戻った。

その後、課長からメールが何度も届いたけど、無視し続けた。

一日休んで次の日から、課長の攻撃が始まった。

ホントに切ってやるって思ったのになあ。

残業には絶対残ってるし、夜遅いからって絶対送らせろって待ってる。

「恋人になったつもりですか？」

って聞いてみたら

「そのとおり」

ってとろけるような甘い声で囁かれた。

「それではお聞きしますが、私は何人目の恋人なんですか？ 本命も数に入れてくださいよ？」

課長はクスッと笑って、

「それ、答えなくちゃいけない？」

課長は目を細めて私の頬を撫でて言った。

「1人目だよ」

「...え？」

最初に体だけの関係でと言ったのは課長の方なのに、1人目ってどういうこと？

「俺はお前の恋人じゃないの？」

明らかにからかっている声に腹が立つけど、低い声に腰が砕けそうになって焦った。

課長の声好きなの。

そこから課長のこと好きになったの。「好きでなければ抱かれませんか」と言う前に唇ふさがれた。

「好きだろ？ 俺のこと」

悔しいから返事してあげません！

荒野の町で、男はいつも笑顔で為すべきことを説いて回った。

「さあみなさん、花を植えましょう。花が咲いたら今度は作物を。きつとうまくいきますから」

大人は耳を貸そうとしない。

大人は疲れているんだからゆるしてあげようと、男は笑う。

子ども達はいつでも男の味方だった

子ども達が男と一緒に種を植える。

大人達は

「花を植えて何になる。作物を植えて何になる」

口々に言いながら薄ら笑いを浮かべ酒と薬に酔うばかり。

そして目障りな男をなじる。言葉で、拳で。

それでも男は言うのだ。口から血をながらしながら。

「ムダではありません。花を植えましょう

きつとうまくいきますから。きっと花が咲きますから」

そうして男は町中のいたるところに種を植えた。

昔からこの村では作物が取れなかった。この村には作物にまくほど水がないのだ。

かくして男と子ども達が植えた花も、芽吹いたそばから枯れていった。

「目障りだ」

大人達は言う。

何度やってもだめだった。作物は育たない。何故それがわからない。

大人達は男に食べ物を売らなくなった。

子ども達が男に近づくことも禁じた。

町の中で男に近づく者はいなくなった。

子どもで独り暮らしのリーシャの家に泊まりながら、男は種をまき続けた

ある日、男はリーシャの小さな膝の上で暫く泣いていた。

「リーシャの瞳はまるで海のようなね。

海は見渡す限りの水なんだよ。

空の青で染まった青い海は本当にキレイなんだ」

「すごおい！私も見てみたい！」

無邪気に笑うリーシャに

「君が大人になったら行くといい」

そう言いながら男は泣いた。

男は旅立っていった。

その背中を追いながら、リーシャは遠く遠くにある海に男は帰っていったのだと思った。

大人になったらあの男を探しに行こう。

そして青い青い海を一緒に見るんだ。

早く大人になりたいな。

リーシャは砂塵の音を枕に青く澄んだ夢を見る。

その夢が叶うと信じながら

たまちゃんの夢

そいつは夜中になると現れる。

最初は見て見ぬふりをした。

だってさ、夜中にちょこちょこ部屋の中を歩くんだぜ？ オバケか何かと思うじゃないか。

そいつは俺が寝ているのを確認すると、部屋の中を物色していく。

一昨日は食べかけのつまみ、昨日は歯ブラシだ。

俺は今日こそそいつを捕まえようと待ち構えた。

今日は何を取っていくつもりだろうとこっそり様子をうかがう。

来た。

いつものように俺が寝ているか確認してから移動。ランドリーの中からよりによって使用済みパンツを思い切り引っ張っているけど、靴下の臭いにむせた。

あれ？ こいつ、見たことあるかも？

もっと近くで見てやろうと、そお〜っと近づいて電気を付けた。

びくっとしたそいつは、おそろおそろ俺を見上げた。

に、似ている。

猫耳つけてる身長50センチのミニマムなそいつは、同僚の玉置にそっくりだった。

「たまちゃん？」

愛称を呼べば、

「たまちゃんじゃないです！」

と叫んだ声もそっくり。仕草もそっくり。絶対玉置だろ？

「たまちゃんじゃないもん。ねこちゃんだもん」

そう言って目を両手でおおってシクシク泣き始めた。

「そのねこちゃんは毎晩何しに来てるのかな？」

するとそいつは俺のパンツを握りしめ言った。

「復讐です！」

はい？

「復讐って！俺、何かした？」

「何かしたじゃありませんよ。毎晩うちのたまちゃんを泣かせているくせに」

ちょっと待て。なんだそれは。

「毎晩ボクを抱きしめてあなたの名前言いながら苦しいって悲しいって、泣くんですよ！」

「どういうことだ？ 全く身に覚えがないんだが？」

「身に覚えがないなんて。なんてひどい人なんだ！」

やっぱりあなたにはもっとひどい目にあってもらわないといけませんね。考えておきます」
そう言ってたまきちゃんはパンツを引きずりながら玄関から出て行った。

.....やっぱり夢を見てるんだ。そう思いながら俺はもう一度布団に入った。

次の日もたまきちゃんは来た。

持って行ったものは何処かに捨てたのかと思ったが見つけれなかった。

まさか玉置の部屋に放置...いやいやいやいくらなんでもそれは...

でも確認してみる必要はあるだろう。

俺はバイト終了後、こっそり玉置の後を付けて自宅を確認すると部屋をノックした。

「はい」

出てきたあいつは俺の顔を見るとみるみる蒼白になり、ドアを閉めようとしたから片足突っ込んだ。

って痛っ

「人の顔見るなり閉めるのかよ！」

叫ぶと

「すみません！」

って手を離した。

「どうぞ」

ビクビクしながら開けてくれたから入ってみた。女の子らしい部屋に少し緊張した。

探してみると、ベッドの上に猫のぬいぐるみがいた。こいつか。

睨みをきかせながら勧められるままに座ると、何かの袋を持った玉置が目の前に座った。

「あのこれ」

袋の中には細々としたものが入ってた。全部たまきちゃんに取られた物だった。

「先輩の物ですか？」

「あ、そうだよ」

すると玉置はさめざめと泣き始めた。

聞けば俺の部屋に行って何かを取ってくる夢を見るそう。

そして毎朝枕元に物が置いてある。パンツの時はマジで泣いたってそりゃ泣くわ。

猫のぬいぐるみを睨み付けながら、泣いている彼女の頭をぽんぽんと叩いた。

「泣くな。気にしてないから」

その夜、ねこちゃんは来るなり俺のほっぺたをペチペチ叩いた。

「ゆるせない。たまちゃんなかせた」

いや、泣かせたのはお前だろ？

「まあまあ。今日はこれを持って行けよ」

俺はあらかじめ用意しておいた手紙を渡した。

「効果絶大。絶対笑うから」

「ほんと？」

「...たぶん」

自信はある。

かくして、忠実な猫のぬいぐるみはちゃんと手紙を届けてくれたらしく、俺の目の前に玉置がいる。

「あの、手紙が」

「うん、俺が書いたのわかったでしょ？」

「はい。あの.....どうしても言わなくてはいけないのでしょうか？」

言い出しにくそうに彼女は言った。

「君の枕元に俺の元がこれ以上増えないようにするにはこれしかないと思うんだよね」

彼女は渋々.....いや、ぜったいそうじゃないだろ？ さあ言いなよ。

「私、先輩が好きです。毎晩夢で見るくらい」

だよね。

「俺もだよ」

あれから一度もねこちゃんは来ない。

そのかわり俺が玉置の部屋に遊びに行くようになった。

猫のぬいぐるみは相変わらず恨めしそうに見上げるから、俺は鼻で笑った。

お前のご主人様は必ず幸せにしてやるからベッドからどいてくれ。

俺はそいつを床に落として、彼女にキスをした。

先輩にコクったらふられた話 (BL未満)

好きな人がいる。

それは一つ上の先輩で、物静かで格好いいのにたまに面白くて、一緒にいたいと思わせるような人だった。

サークルの中でもファンクラブがあるくらいだ。

その中の一人が

「先輩は公共物だから告白とか絶対なし」

と納得させたその張本人が告白した。

だから僕も告白した

「はあ？告白した！？」

美保が呆れ顔をする。

僕は膝を抱えて部室の隅でべそべそ泣いた。

まさか真っ青な顔されて逃げられるなんて。

「お前だって告白したんじゃっ」

ひくひくと喉が詰まる。

「当たり前でしょ？好きな人に告白して何が悪い」

「だから僕も」

「男同士なんてありえないし」

たしかに先輩は男で僕も男だけどさ、一緒にいたいって思う気持ちは純粹にそれだけ。

キスしたいとかエッチしたいとか思ってない。

「あんたって馬鹿だったんだね。ストレートに告白してもダメに決まってんじゃん。まあ私も振られたけど。好きな人がいるんだって」

「え...」

初耳だ。

次のサークルに先輩が来た。

女の子に囲まれているのを遠目でじっと見ていると、先輩は僕の方を見て頭を掻いて

「園田、ちょっと」

って呼び出し。うわっどうしよう。この前のことだよな？

なかったことにしてくれないかな。

廊下と一緒に出て向き合う。

先輩が困った顔をした後、笑った

「正直びっくりしたけど、やっぱお前は後輩以上に見られないから。これからもよろしくな」
ちゃんとした返事っ.....泣きそうだ。

真面目に僕のことを考えてくれただけで胸がいっぱいだ。

「……好きな人がいるんですよね？」

「あ、あれ嘘。虫除け」

そう言って先輩は魅惑的な顔で笑った

「モテるから告白されたらそう言っておけって言われてさ」

すっごくイヤな予感。

「誰にデスカ？」

「ああ、美保だよ。付き合ってるの。俺達」

って先輩は俺の後ろに向かって手を振った。美保がにんまり笑う。

「…みほおお！！」

追いかけてながら悔しさに涙が止まらなかった。

今度恋するときは面倒な女がいない奴にする！

拾った女の子の話

せっかく気持ちよく寝ていたのに来客を告げるチャイムで目が醒めた。

覗き窓から見るといつも楽観的なヤツの神妙な顔。

土砂降りの中傘も差さずに来たってことは…。

多めのタオルを持って玄関を開けてため息。

「またかよ」

ヤツの鎖骨に顔を埋めてるのは女の子。

「ごめん、拾っちゃった」

この前は犬だった。

早朝の廃ビルで見つけたという女の子をかいがいしく世話を焼くあいつ。

女の子は捨て犬みたいに『拾って下さい』と書かれたダンボールの中に入れていたという

。

朝飯を作りながら悪態をつく、奴は

「自分みたいで放っておけなくて」と

苦笑した。たしかにこの前フったけど捨てた覚えはない

拾った女の子を風呂に入れて着がえさせようと思ったが、女物の服なんぞ家にあるはずもなく、俺のスウェットを貸すことになった。

「よかったなあ、面倒見てもらえて」

とかお前が言うな。

女の子は俺が作った朝飯を平らげたところでやっとひと心地ついたのか、笑顔を見せるようになった。

「どこに電話するの？」

携帯を手にした俺に女の子がか細い声で言った。

「警察」

「ちょ、ちょっとまって、何か訳ありなんだよ。少しゆっくりさせてあげようよ」

慌てる奴に俺は女の子の頭を撫でてやりながら、極力優しく笑って見せた。

「お前は自分を捨ててどうするつもりだったんだ？　できすぎなんだよ。

人を捨てるのに拾って下さいなんて書くわけがない。

それは拾って欲しかったお前が書いたんだろう？」

女の子は視線を落とし、そのままクスッと笑った。

「半分正解。私を拾うような物好きがいるわけないって思ってたもの」

「でも僕が拾った」

奴はまっ赤な顔で震えながら言った。

「僕が拾ったんだから、あんたは僕の物でいいよな」

怒った奴の顔を見て、女の子は笑った。

「いいよそれで。シても殺してもいいよ」

奴は女の子の頬に手を当てた。

「悲しいこと言うなよ。せっかく拾ってやったんだから、ちゃんと幸せになれよなあ」

ボロボロ涙こぼして。あ～あ。大の男が泣くなよ。

ぐずぐずと泣く奴を尻目に俺は女の子に連絡先を聞き、親御さんに迎えに来てもらうことになった。

警察に連絡済みだったらしく、俺達は危うく犯罪者にされるどころだった。

聞けば家出の常習者だったらしい。

警察に事情を聞かれ、捨ててあったと言ったら警察官も呆れた顔をしていた。

警官と女の子が帰っても、奴は部屋の隅でシクシク泣いていた。

「お前もそろそろ帰れ」

「冷たいよお前、僕も捨てたし」

「捨ててない。もし捨てるなら殺して山奥に埋める」

ったく恨めしそうにこっち見るな。

でもお前が捨てられたら真っ先に拾うけどな。

end

ついのべまとめ2011年6月～9月

<http://p.booklog.jp/book/37571>

著者：みずきあかね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akane2003/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37571>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37571>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.